

高齢女性の会話に見られる 「グループ・アイデンティティー」について

梅 本 仁 美*

On the “Group Identity” Conveyed in the Conversations of Elderly Japanese Women

Hitomi Umemoto*

Abstract

The purpose of this paper is to investigate how women over 70 years of age in Japan interact with friends of the same sex in informal situations. The objective in analyzing their actual conversations was to gain knowledge of some of the particular conversational styles of elderly women through their interaction.

For the analysis of their interaction, the participants were women ranging in age from 70 to 80 years. In order to collect data, they were asked to pair with a friend to enable them to behave more or less naturally.

Analysis of the data revealed that participants conveyed their “group identity” as “elderly people” in their conversations. They considered “elderly people” to be a social group and recognized that they are members of this group. Their acceptance of the fact that they are all members of the same social group appeared to enhance their involvement with each other.

キーワード

高齢女性、グループ・アイデンティティー、関わりあい、相互行為の社会言語学

I はじめに

急速な高齢化傾向が進んだ結果、いまや日本は世界でも有数の長寿国となった¹。以前と比較して仕事に従事している高齢者も増加し、現在ではその数は500万人を上回っている。このように社会における高齢者の位置づけが変化したために、高齢者に対する関心は高まりつつある。それにもかかわらず、高齢者に対する否定的なステレオタイプは依然として存在し、これが高齢者とのコミュニケーションの場面においても好ましくない影響を

*うめもと ひとみ：大阪国際大学留学生別科非常勤講師（2007.12.25受理）

与えていることが多い。

では、会話を始めとする高齢者とのコミュニケーションの場においては、高齢者に対する否定的なイメージがどのような影響を与えているのであろうか。例えば介護施設や病院においては、身体的な衰えはあるものの、精神面では成人として扱うべき高齢者に対して、赤ん坊に語りかけるような「ベビー・トーク」を用いている専門家もまだまだ多いと聞く。これは介護者が高齢者に心的により近づこうとして用いた言語表現が高齢者の誇りを著しく傷つける「過剰適応」(overaccommodation) になってしまっている例²である。このような例は介護や医療の現場に限らず、一般家庭においても見られるものだろう。このような接し方では、高齢者と対等な関係を築いているとは言えず、彼らの尊厳を傷つけていると言われても仕方がない。

そこで本研究は、実際の高齢女性の会話データを収集し、それを質的に分析することによって、これまであまり研究されてこなかった高齢者のコミュニケーションの特性を実証的に明らかにすることを目的とする。

Ⅱ 高齢者のコミュニケーションに関する先行研究

本章では、これまで行われてきた高齢者のコミュニケーション研究について簡単にまとめることにする。宇佐美 (1997) によれば、アメリカをはじめとする欧米では「高齢者に対するコミュニケーション行動」に関する研究が1970年代から盛んに行われるようになり、他世代の高齢者に対する過剰な適応行動が批判的に研究されるようになってきているということである。

Ryan et.al. (1995) は、心理言語学的な立場から「庇護者のようなコミュニケーション」(patronizing communication) の特徴を明らかにし、このようなコミュニケーションのあり方が、世代間のコミュニケーションギャップを助長し、若い世代の高齢者に対するステレオタイプを強化することになっていると主張する。

同様な立場に立つ研究にCoupland, N., J.Coupland & H.Giles (1991) がある。この研究では、高齢者の会話における打ち明け話に注目し、会話の参加者が、健康状態の問題や配偶者の死などについて語り、それをもう一方の参加者がどう受け止めるかについて分析している。これは高齢 (70-87歳) の女性同士、30代の女性と高齢者、30代の女性同士の1対1の会話などのデータを量的、質的の両面から分析し、「言語的収斂」(linguistic convergence) の特徴と問題点を報告したものである。

またSawin, P.E. (1999) では1人の高齢女性の語りに注目し、その中に表れる語り手のアイデンティティーについて明らかにしている。

これに対して、これまでにわが国で行われてきた高齢者のコミュニケーションに関する研究は医学や介護の立場からのものが主流であった。そのため、辰巳 (1997) のように加齢によるコミュニケーション能力の低下が研究の焦点になっているものが多い。また言語学の分野においても、小野田 (2007) が行った介護付施設に暮らす高齢者に対するインタビューの分析や、遠藤 (2000) によるパーティーのスピーチ分析などの研究が大半であり、

実際の高齢者同士の会話データを実証的に研究しているものは残念ながらまだほとんど行われていない。

Ⅲ 「社会グループ」としての「高齢者」

1 「高齢者」とは何か

一口に「高齢者」と言っても、その定義はあいまいである。老人福祉法の第2章において、福祉の措置の対象年齢は65歳以上となっているが、老人保健法では、後期高齢者医療制度の施行により、医療費の給付対象者を75歳以上とした。このように法律上においても統一された区分がされていない。

また筆者は20代から80代の男女約40人に「一般的に何歳から高齢者に入と思うか」という簡単なアンケートを行ったが、回答は60歳から、65歳から、70歳から、というものが多きものの一定せず、その根拠も年金の受給開始年齢、退職年齢、また個人的な印象など、人によってまちまちであった。

この様にその区分があいまいな高齢者ではあるが、他世代は高齢者を自分たちとは異なった特性を有する、ある特定のグループに属すると認識し、文化を異にしていると考えている。また高齢者の中には、自分自身を同世代の他の人よりも若くて健康であると主張することにより、自らを「高齢者」グループから分離しようとする人がある³。逆に「もう年だから」と自らの衰えを「高齢者」の属性に一般化する人もいる。このように高齢者自身も自分と同世代のグループ⁴が存在するという認識を持っている。

2 「グループ・アイデンティティー」とは

Tajfel (1981:255) は、「社会的アイデンティティー」(social identity) とは、「自分がある社会グループのメンバーであるという認識から生じる個人的な自己概念の一部であり、そのグループのメンバーであるという価値観や感情的な重要性和結びついているもの」であるという。Tajfelは、人があるグループに帰属意識を持つかどうかは常に他のグループとの対比によって判断されると考えている。

しかしこれに対してBaumanは、アイデンティティーとはその場の状況に応じて動機づけられ、獲得されるものであると主張する。したがって人は社会的に構築されたアイデンティティーの目録(repertoires)の中から、その都度その場の状況に応じて選び出し、相互作用を通して他者に表明しているという(Bauman 2000:1)。

de Fina (2006) はBauman (2000) のこの立場を支持し、「グループ・アイデンティティー」(group identity) という概念を用いて、アメリカ合衆国に不法に滞在するメキシコ系の移民の語りを分析している。これによれば、あるグループのメンバーであるという意識は時間的にもまた地域によっても連続的に変化し、また集団レベルでのアイデンティティーばかりではなく、個人としてのアイデンティティーも表現されるとする。またこのようなアイデンティティーは、その社会や文化に所属する人間が共有する知識に基づいて作られると考えている。

本稿においてはこの「グループ・アイデンティティー」という概念を採用し、「高齢者」と「女性」という2つの社会グループに属するインフォーマントが、その会話において、どのようにグループ・アイデンティティーを表現し、メンバー間の関わりあい⁵を強めているかに注目して分析を行っていく。

次章では、分析に用いる枠組みとデータについて述べる。

Ⅳ データと分析の枠組み

1 分析の枠組み

本研究においては、会話をめぐる参加者の関係を明らかにするために、相互行為の社会言語学の枠組みを用いて分析を行う。この枠組みは、相互行為に関わる参加者の文化的、社会的背景や、その相互行為が行われている文脈をも考慮して、参加者同士、また参加者とその発話をめぐる関係を明らかにしようとするものである。本研究ではこの枠組みを用いて、参加者が高齢者としてのグループ・アイデンティティーをどのように相互行為の中で位置付け、そして相手に伝えているのかを分析していくことにする。そのためには、この枠組みの重要な概念である「産出フォーマット」⁶や「文脈化の手がかり」⁷が有効であると思われる。

2 データについて

データ収集に協力してくださった高齢女性は、関西在住で70代から80代の方である。より自然に近い会話データを得るために、インフォーマント自身に日頃から親しい付き合いのある友人を会話のパートナーとして選んでもらい、一組ずつのペアになって旅行、健康、趣味、家族といった日常的なテーマから自由に話してもらうことにした。データ収集は2007年9月から11月、筆者の自宅、あるいはインフォーマントの自宅やサークル活動の場で行い、ICボイスレコーダーで録音した。収集した会話データは文字化⁸し、質的に分析した。

Ⅴ 分析と考察

1 「高齢者」がグループ・アイデンティティーを表示している例

本節においてはインフォーマントが「高齢者」について語っている表現において、グループ・アイデンティティーを表示していると考えられるデータを分析する。以下の〔抜粋1〕は、YとKが互いの健康法や食事について語っているデータの一部である。Yが紹介した息子の健康法から、互いの好みの食事について話題が移っていく場面である。

〔抜粋1〕：好みの食事

01Y：うちももう長男はねーあの一お酒は飲みますけども、あの一お水はね//かなりベ
ットボトル一日に一本200、2000ですか、おっきい//ねえ一本飲んでますよ。

- 02K: //はい。
- 03K: //ああはあはあ。
- 04K: ああそう。
- 05K: あの私も今、ちょうどなんかハワイの深層のね//あの水を
- 06Y: //はい。
- 07Y: 深層水?
- 08K: ふん。
- 09Y: ふん。
- 10K: あれをちょっととって、今これから、今飲んでるところですけどね。
- 11Y: ああそうねえ。
- 12K: そやけどそんな飲めませんわ、私らはそんだけ//
- 13Y: //あのねーやっぱり、こう私らの
年になってきたら、冷たいものよりか//あったかいものの方が、あの一受けつけ
ますでしょう?//体に。
- 14K: //はあはあ。
- 15K: //そうねえ
- 16K: そうそうそう。
- 17Y: ねえ、だから三度の食事はお茶、あったかいお茶で、ご飯いただく。
- 18Y: // [笑]
- 19K: // [笑]
- 20K: やっぱそこが若い人と違うとこやろね?
- 21Y: そうやねー。
- 22Y: でもあったかいおつゆは必ず三度付けて//お食事のときはいただきますけどね。
- 23K: //はあそう。
- 24K: やっぱ私らどうしても和食がいいですね。
- 25Y: そう、そうねえ。
- 26K: どうしてもほんまに//
- 27Y: //手間かかるけどね。
- 28K: そうそう。

Yは、自分の長男が健康のために1日に2リットルもの水を飲むと語る。これに対してKは、自分も最近ハワイの深層水を取り寄せて飲むようにしているが、1日に大量の水を飲むのはなかなか難しいと応じる。この「私らはそんなにたくさん水を飲めない」と話す12Kの発話に注目してみよう。ここでの主語は「私」ではなく「私ら」と複数形になっている。これがK夫婦を指すのか、またKとYを含む高齢者全般を指すのかはあいまいである。しかし、01Yの発話を受けての発言であることから、Kが、KやYの子ども世代と「私ら」世代を対比して発言していると推察できる。これに続く発話13で、Yも「私ら」を繰り返している。この繰り返しを「文脈化の手がかり」として、Yが、Kが自分たち2人を

同じグループに属するメンバーであると考えていることを理解していることがわかる。さらに「私たちの年代になったら」と、Kの意図をより明確に言い直している。この13Yの発話をKが支持しているのは、この発話に対してKが盛んに相づちを繰り返していることから明らかである。「冷たい水をたくさん飲めない」というKの当初の発話は、その後のYの「食事の時には温かい物を摂りたい」という主張へと変化し、やがては「和食がいい」という意見にまで発展していく。これらは、本来はKとYそれぞれの個人的な嗜好であったはずであるが、互いに「私たち」という指示代名詞を繰り返すことによって、「冷たいものをあまり摂らず、温かい和食を好む」のが自分たち世代に共通する嗜好であるとの見解を示している。これは2人が、ある程度高齢になると身体に悪いとされる冷たいものを避けるようになり、健康に配慮して温かい和食を食べるようになるという知識を共有していることから成立したものだろう。

KとYは実際には10歳という年齢の開きがあるものの、自分たちが共に高齢者というグループに属していると考えており、「高齢者」と対になるカテゴリーとして「若い人」を想定している。そして2人が「温かい和食を好む」という特性が高齢者に特有のものであり、若い人と異なる点であると考えているのは、20Kの発話と、それに対するYの相づちから明らかである。

この抜粋では、インフォーマントが「私たち」という指示代名詞を繰り返し用いて互いのグループ・アイデンティティーを確認し合い、個人的な食事の嗜好の話題を高齢者という同じグループに属するメンバーに共通の嗜好であるとみなすことによって、互いの心的距離を縮めることに成功している。そして頻繁な相づちと相手の反応を確かめるように語尾につけられた「ね?」という接尾辞がこの効果を補強している。

次のデータを見てみよう。ここではGは自分がこれまで習っていたお稽古事（書道）についてYに語っている。

[抜粋2] Gのお稽古事（習字）について

01G：で、先生「ここで書きなさい」言わはるねんけど、//それで楷書行書細字//ペン字//実用書、んで仮名//それからあのー今までの自分で詩を書いて、その字をね、//「仮名のようにしてちょっと太いめの変った字を書いてきなさい」言うて七種目書いていくねんね。

02Y： //うんうん

03Y： //ペン字

04Y： //はいはい

05Y： //ふん

06Y： //ふん

→07G：それが書かれへんのよ、もう自分も年やからね。

(中略)

08G：そんなんでもう多芸なことはもうー浅く//広くやからもー//

09Y： //広く？

- 10Y: //いつも言われる
もんねえ。
- 11Y: {笑}
- 12G: いつも言われるねんもん、もー。
- 13Y: そやけどそれの方がいいのん違います？
- 14G: いやーもう//
- 15Y: //根気がないから。
- 16G: {笑}
- 17Y: ね、年いってきたら根気がないもんね。
- 18Y: そやから浅く広くの方が私はいいと思う。

Gは書道の先生が出した課題を全てこなすことができないと語っている。そして、いろいろなお稽古事が長続きしないとも述べている。Gはその理由を、07Gで自分が年をとってきたからであると述べている。それに対してYは、「もう、根気がないから」と応じる。Yのこの発言によって、フレーム⁹が「自分に対するからかいのフレーム」に変化したと解釈したGは笑う。

しかしYは、あれやこれやといろいろなお稽古事をするGに対して「根気がない」と評したわけではない。Gの笑いを文脈化の手がかりとして、自分の発言意図が正確に理解されなかったと判断したYは、17Yで「年をとったら根気がなくなる」という表現で、自分が「根気がない」ことをGの欠点であると批判したわけではなく、高齢者に共通の属性であると考えていることを、より明確に言い直している。つまりYは、自分自身もGも共に「高齢者」というカテゴリーに入ると考えており、そのグループのメンバーは共通して「根気がない」という特性を持つと考えているのである。しかもYは、加齢によるこのような変化を決して否定的には捉えていない。Gが何にでも「広く浅く」興味を持つことを評価し、13Yで「その方がいい」と述べている。そしてその根拠を、「広く浅く何でもする方が年をとって根気がなくなってきた自分たちには合っている」と17Y、18Yで説明している。

「年をとる」、そして「根気がない」という、一般的には否定的なニュアンスで語られる表現を、Yが決して否定的に使っていないのは興味深いことである。これはYの自己評価が肯定的であると同時に、同じ「高齢者」というカテゴリーのメンバーをも肯定的に受け入れていることの表れであると考えられる。

このデータにおいては、「高齢者」というカテゴリーが、会話の参与者同士が同じグループに属し、同じグループ・アイデンティティーを持つという主張を補強し、メンバーの距離を縮めるために使われている。しかもこのカテゴリーは、参与者によって、一般的に考えられているような否定的な捉えられ方をしていない。さらに「根気がない」という属性も、Yは否定することなく受け入れ、むしろ積極的にこの変化に適応していくという生き方を選択しようとしている。

このように、Gの「自分は広く浅く何にでも興味を持つためにお稽古事が長続きしない」

という主張を、Yは「根気がない」という特性を持つ「高齢者」に共通するものであると解釈し直し、単にG1人の問題ではなく、自分たち全てに通じることであると主張することによって、2人の関わりあいを強めることに成功している。

2 「高齢者」がグループ・アイデンティティーとして機能していない例

前節で検討した2つのデータは、会話の参加者が自分たちを互いに「高齢者」という共通のグループに属するという前提に立ち、そのグループ・アイデンティティーを共有することによって互いの関わりあいを深めてきた例である。しかし、この「高齢者」であるというカテゴリーは常にグループ・アイデンティティーとして機能しているとは限らない。

次の2つの抜粋においても、客観的に見て高齢者に属すると考えられる参加者が他の高齢者について語っているが、会話は前節のデータとは異なった展開になっている。

[抜粋3]：夫の入院

01K：そやけど毎日その氷をね//やっぱし冷たい。

02Y： //はい。

03Y：うん。

04K：ポットに入れて持って行ってね//入れ替えて。

05Y： //ああそうねえ。

→06K：やっぱしねえ、あの生ぬるいのが嫌なんですって。

07Y：ああ、はいはい。

08K：熱いのやったら熱く、で冷たけりゃ冷たいと。

09Y：うーん。

10K：その、中間でしょう？病院は。

11Y：そうねえ、早く持ってきてはるから。

12Y：そうです、そうです。

→13K：で、それはやっぱ年寄りにね、向かないみたい。

14Y：ああなるほどねえ。

→15K：85もなったおじいさんだからもうしょうがないですけど。

16K：{笑}

Kは今年の夏に入院した夫のわがままに閉口したエピソードをYに語っている。Kの夫は、病院から支給される生ぬるい水が気に入らず、それを冷やすための氷を、Kに自宅から持ってくるように求めた。

高齢の夫が冷たい水を好むのは、先述の[抜粋1]の「私らの年代は冷たいものより暖かいものを好む」という発言と矛盾している。しかしKは13Kで「温かくも冷たくもない温度のものは年寄りには向かないみたいだ」と語っている。この抜粋に見られるKの言語表現は[抜粋1]と明らかに異なっている。それは06Kの「ですって」や13Kの「みたい」という語尾から明らかである。このように伝聞や推量を表す表現を用いて、Kは夫の意見

から距離を保ち、あくまでもこれが夫個人の好みであることを示そうとしている。Yについても同様で、「ああ、はいはい」、「なるほど」といった相づちを打つだけで、積極的にKの発話内容を支持したり、その発話を引き取って発展させたりする様子は見られない。

Kは夫が生ぬるい水を嫌うのを「年寄りには向かないみたい」と納得できない風に語り、夫のわがままを「85もなったおじいさんだから仕方がない」と締めくくっている。ここには自分たちが同じグループに属することを示す「私ら」という指示代名詞は一切使われていない。Kは夫が高齢者に属するとはしながらも、それが自分たちと同じグループに属するという認識を持っていない点で、先の2つのデータとは明らかに異なっている。

次に紹介するデータも同様である。Mはある女声コーラスグループを指導している。このグループは毎年クリスマスの時期にコンサートを開くが、今年は別の男声コーラスグループと合同でコンサートをするになっている。以下の抜粋は、その練習模様やコンサートについて、友人のSがMに質問しているところである。

[抜粋4] 男性コーラスグループとの合同練習

→01 S：それよりクリスマスの歌、歌、コーラスの//話、皆さん、男女共学で// [笑]

反応はいかが？

02M： //歌。

03M： // [笑]

04M：まあー、見ない方がいいわ。

05 S： [笑]

06M：ええ声 [笑] 後ろからね、ワーってええ声男の人出してんねん、皆じーっと前見てる。

07M：「後ろ見たらあかんよ//後ろ見たらあかん。」

08 S： // [笑]

09M：// [笑]

10 S：// [笑]

11M：「じゃあ、立ちましようか」ゆうたら、まだ女の人はね、70やからね、シュッと立てるけれど。

12 S：ふん。

13M：もうつかまり合って立ちはる。

14 S： [笑]

15M：んで、何の曲ゆうてもパラパラパラパラパラ。

16 S：うんうんうんうんうんうん。

17M：ひどいで。

18 S： [笑]

19M： [笑]

20M：でも声はええわ。

21 S：あ、そうふーん。

- 22M：声はええわ。
23S：ふーん。
24S：なるほど、すぐ立て// [笑]
25M： // [笑]
26M：立たれへん。
27S： [笑]
→28M：ほんで、前の日に//こないだ練習の、前の日に、本番がひとつあって//80のおじいさんが、ステージで倒れはったんやて。
29S： //うん。
30S： //うん。
31S：あ、そう、ふんふんふんふん。
(中略)
32S：で、今度の舞台、クリスマスの//コーラスの舞台華やかでしょう？きっと。
33M： //うん。
→34M：いや [笑] 華やかじゃないよ、も、よれよれが来たら、むしろ。
35S：あ、そうー。
→36M：ほんまによれよれ。
37S：あ、そう、そんなに年配なの？男性
→38M：80とか。
39S：あ、そう。
→40M：平均年齢が75ぐらいかな
41S：あ、そうー//ふーん。
42M： //うん。
→43M：でね、ちゃんと立ってられる人が3、4人//かな。
44S： //ふーーん。

MとSは共に70代前半である。2人は長年親しい関係にあり、ほぼ毎週会っている。したがってSは、Mの指導する女声コーラスグループが、今年初めて別の男声コーラスグループと合同でクリスマスコンサートを行うことも承知している。それについてSは「男女共学」というユーモラスな表現を使って01Sで質問している。実はこの女声コーラスグループは、ある女学校の卒業生たちが集まってできたものであり、学生時代には男女共学の経験がない。そのことを踏まえてSは「初めての男女共学に対する女性の反応はどうか。」と問いかけたのである。Sが混声グループの集まりをどう適切に表現しようか迷った末に、この「男女共学」という表現を選んだのは、この言葉の前に置かれたポーズで明らかである。そして年齢という要素を払拭した、女性対男性という対のカテゴリーを包含する「男女共学」を用いたと考えられる。

この語の持つ、和気藹々とした楽しい男女のサークルといった雰囲気を否定するかのよう、04Mで「まあ、見ない方がいい」と答えている。そして女性グループが互いに声を

掛け合っている様を、アニメーターであり、オーサーとして「後見たらあかんよ」(06M)と表現している。この場合のプリンシパルはM自身でもあるが、直接話法を使っていることから、女性グループも同様にプリンシパルを担っていると考えられる。実はコーラスグループとしては男声グループの方がキャリアもあり、当初は女性たちと一緒に練習するのを楽しみにしていたらしい。ところが、男性たちが思いの他高齢であり、長時間立って歌うのが困難な人もいることから、女性側の反応も変わってしまったようである。

Sが最初に提示した男性対女性というカテゴリー対に対して、Mは異なったカテゴリーでこの集団を捉え直している。それは「まだ70代で元気な女性」対「80歳前後の自力で立つのもままならない高齢男性」という対である。年齢的には、女性グループも男性グループもどちらも高齢者の範疇に入ると考えられる。しかし実際にこのメンバーと接しているMにとっては、到底この2つのグループを同じグループに属するメンバーであるとは認めがたかったのだろう。

実はコーラスグループとしては、男性の方が実力は上であるという。しかし平均すると75歳という高齢のために、これから歌う曲の楽譜をなかなか探し当てられなかったり(15M)、さっと立ち上がることができなかったりと、年齢による衰えが多いとMは感じている。そこでいざ立ち上がろうとする時に、女の方は「シュッと立ち上がる」(11M)が、男性グループは「つかまり合って立つ」(13M)というように、対比的にその違いを表現している。コーラスの実力については評価するものの、その体力的な衰えに対しては、「よれよれ」(M34、M36)といった表現が使われ、否定的な見方がされている。

この[抜粋4]においても[抜粋3]と同様に、話題に出てくる「高齢者」と話し手の間に明らかに心的な距離がある。そのために、前節のデータに見られたような「私ら」という指示代名詞や、受け手の反応を確かめる接尾辞が見られない。「高齢者」というカテゴリーが、単に年齢が高い人という意味で使われているに過ぎない。そしてエピソードの中で語られる人物に対して、「見ない方がいいわ」や「ひどいで」、「よれよれ」といった否定的な評価を与えている。[抜粋3]においても、このようなはっきりとした否定的な表現はないものの、「85もなったおじいさんだからしょうがない」と消極的な容認がされているに過ぎない。

ここに挙げた4つのデータを比較してみると、会話の参加者が常に「高齢者」というカテゴリーを自分たちが所属するグループであると認識し、互いの関わりあいを深めるために用いているわけではないことがわかるだろう。話し手が自らの考えを語り、それに対して受け手に共感を求める時、また逆に受け手が話し手に対して共感を示そうとする時、自分と相手が同じ「高齢者」グループのメンバーであると示すことによって、その意図を相手に伝えることが可能になる。このように会話の参加者は、文脈に応じて「高齢者」というカテゴリーを使い分け、時には自分たちの関わりあいを深めるための戦略として用い、また時には、単に客観的に文字通り「年をとっている人」という意味合いで用いているのである。

V おわりに

これまでに行われてきた先行研究は、高齢者の話し方に対して「冗長でいつまでも肝心なことが出てこない」(外山 1999)とか、「一方的に同じ話を繰り返す」(小野田 2007)という否定的な見方をしてきたものが多い。そして時にはそれが、高齢者のコミュニケーションスタイルに対する否定的なステレオタイプを補強するという結果にもなっていた。

そこで本稿では、高齢女性の友人同士の会話データを質的に分析することにより、実際の高齢者のコミュニケーションがどのようなものであるのかを明らかにしようとした。その結果、インフォーマントが「高齢者」というカテゴリーを自分たちが所属する社会グループであると捉え、そのグループに共に所属するというグループ・アイデンティティを共有することにより、互いの関わりあいを深めることに成功していることがわかった。

このように、実際の高齢者同士の会話データを検証することによって、加齢による身体的な衰えがコミュニケーションに及ぼす影響ばかりを焦点にしてきたこれまでの研究では明らかにされなかった高齢者のコミュニケーションの一面を浮き彫りにすることができた。今後は、高齢者と他世代との会話や男性高齢者の会話データも分析することによって、より詳細に高齢者のコミュニケーションの特性を明らかにしていく必要があるだろう。

- ¹ 2007年9月15日に発表された総務省の推計によれば、65歳以上の高齢者の人口は2744万人に達し、その数は総人口の21.5%を占めるという。
- ² 話し手が聞き手により心的に近づくとして用いた言語表現が話し手の意図通り相手への「収斂」(convergence)とならず、その逆の「拡散」(divergence)となってコミュニケーション上のトラブルを引き起こす例については、アコモデーション理論 (communication accommodation theory) において取り上げられている。
- ³ これは社会的において「下位」であるとされるグループのメンバーが、個人的に「優位」グループに所属しようとする「同化」(assimilation)の一種に他ならない (Tajfel 1981)。
- ⁴ あるメンバーから成る集団が一つの「社会グループ」を形成していると認知されるためには、(1) 互いに近くに住むか、他と識別できる集合場所を持っている (2) 他と識別できるサブカルチャーを持っている (3) そのグループの存在を認識し、そのグループに属しているということが彼らのアイデンティティの一部になっている、という条件を満たさなければならないという (Coates 1986:7)。この条件と照らし合わせると、他世代と同居、あるいは同一地域に居住し、他所なりとも他世代との交流のある「高齢者」はきわめて特殊な社会グループと言えるだろう。
- ⁵ 「個人が自分を他の人々と結びつけると感じられるような、内面的で感情的な関連」(Tannen 1989:12)
- ⁶ 産出フォーマット：話し手は発声体としてのアニメーター、その発話によって表現される感情、及び言葉を選択する人物であるオーサー、その話された内容によって自らの立場が確立される人物であるプリンシパルの3つのカテゴリーに分類される。さらにその話題に上る人物はフィギュアと定義される (Goffman 1981)。
- ⁷ 「文脈上の前提を伝えるために貢献するあらゆる言語形式上の特徴」(Gumperz 1982:131) 但しこれには統語的、意味論の特徴ばかりではなく、パラ言語的特徴、及び非言語情報も含まれる。
- ⁸ 文字化のルールは以下の通り。//：発話の重なり？：上昇イントネーション。：下降イントネーション。{ }：非言語情報、：ごく短い間 アンダーライン/→：議論の中心となる発話や語句。

プライバシー保護のため、人名はイニシャルにした。

- ⁹ フレームとは、日々の相互作用において、人々が「今ここで何が行われているのか」を正しく解釈するための枠組みである (Bateson 1972/Goffman 1981)。

参考文献

- Bateson, G., A Theory of Play and Fantasy, In *Steps to an Ecology of Mind*, New York:Ballantine Books, 177-193, 1972.
- Bauman, R., Language, identity, performance, *Pragmatics*, 10 (1):1-5, 2000.
- Coates, J., *Women, Men and Language*, London:Longman, 1986.
- Coupland, N., J.Coupland and H.Giles, *Language, Society and the Elderly*, Blackwell, 1991.
- De Fina, A., Group identity, narrative and self-representations, In de Fina, A., D.Schiffrin and M.Bamberg (eds.), *Discourse and Identity*, Cambridge: Cambridge University Press, 351-375, 2006.
- ディヒトバルト, ケン (田名部昭・田辺ナナ子訳) 『エイジ・ウェーブ』創知社、1992年。
- 遠藤織枝「『老人語』の特徴」『日本語学』第12巻、第4号、75-85ページ、1993年。
- 「高齢者の話し方は遅くてわかりにくい」『ことば』第20巻、83-94ページ、2000年。
- 藤田綾子『高齢者と適応』ナカニシヤ出版、2000年。
- Goffman, E., *Forms of Talk*, Philadelphia:University of Pennsylvania Press, 1981.
- Gumperz, J.J., *Discourse Strategies*, Cambridge:Cambridge University Press, 1982.
- 小野田貴夫「高齢者の話す内容・話し方の特徴について」社会言語科学会第19回大会発表論文集、62-65ページ、2007年。
- バルモア, E.B.(奥山正司・秋葉聰・片多順・松村直道訳) 『エイジズム』法政大学出版局、1995年。
- Ryan, E.B., M.L.Hummert and L.H. Boich, Communication predicaments of aging, *Journal of Language and Social Psychology*, Vol.14, Nos.1-2, 144-166, 1995.
- Sawin, P.E., Gender, Context, and the Narrative Construction of Identity : Rethinking Models of "Women's Narrative" In Bucholtz, M., A.C.Liang and L.A.Sutton (eds.), *Rethinking Identities*, Oxford:Oxford University Press, 241-258, 1999.
- Tajfel, H., *Human Groups and Social Categories*, Cambridge:Cambridge University Press, 1981.
- Tannen, D., *Talking Voices*, Cambridge University Press, 1989.
- 辰巳格「加齢現象としての喚語困難」『言語』第26巻、第13号 [315]、26-37ページ、1997年。
- 外山茂比古「現代社会とことばのスピード」『言語』第28巻、第9号 [336]、24-29ページ、1999年。
- 梅本仁美「高齢者のコミュニケーションに関する一考察」『言語文化学』第17号、2008年 (印刷中)。
- 宇佐美まゆみ「高齢化社会のコミュニケーション環境整備のために」『言語』第26巻、第13号 [315]、60-67ページ、1997年。